第３・４回
新 UD 出前講座のコンセプト確認とアイデア出し

（1）プログラム

日　時｜ 11 月 14 日（日）　10：00 ～ 16：00

会　場｜亀戸文化センター５F　第１・２研修室

内　容｜既存 UD 出前講座バージョンアップ報告と

新 UD 出前講座のコンセプト確認とアイデア出し

・既存 UD 出前講座のバージョンアップした内容について報告しました。
・新 UD 出前講座のコンセプトについて事務局から提案し、子ども向けの UD 理解が深まる絵本を読み聞かせしました。
・また、そのコンセプトに関連する「尊厳や社会モデル」についてアドバイザーよりお話いただきました。
・その後、新 UD 出前講座についてアイデアを出しあいました。

タイムテーブル｜

10：00（05 分）　あいさつ
10：05（10 分）　本日のプログラム、前回の振り返り
10：15（30 分）【既存 UD 出前講座のバージョンアップ内容】
10：45（30 分）【新 UD 出前講座のコンセプト】
11：15（10 分）～休　憩～
11：30（75 分）【尊厳と社会モデルについて考えよう】
●川内先生のお話
●意見交換
12：40（60 分）　～昼　食～
13：40（80 分）【グループワーク】新 UD 出前講座のシナリオ案を考えよう
●進め方
●グループ分け
●シナリオを考える
15：00（10 分）～休　憩～
15：10（45 分）発表（発表５分＋意見交換３分＝８分×５グループ）
15：55（05 分）まとめ、事務連絡、アンケート記入
16：00　　終了

（２）既存 UD 出前講座のバージョンアップ内容報告

シーン１のバージョンアップ

●社会モデルを実感

前回｜クイズ「だれが聞こえない人でしょうか？」と聞いて聴覚障害者がわかったあと、すぐに手話通訳を入れて自己紹介をした。

現在｜聴覚障害者が手話で自己紹介をする。進行役は手話ができるので二人で会話をしていると、子どもたちはわからない。「あれ、みんなはわからない？　手話がわからないんだね。では手話通訳にお願いするね」と伝える。コミュニケーションに生じる障害は双方の問題。手話がメインの環境にいる時は手話ができない人は会話がわからないこと、また手話通訳という環境を整えることで会話ができるという、社会モデルを実感できるようにした。

●口話が実感できる工夫

前回｜コロナの関係で口話を見せることができず、「口話は大切です」と伝えていた。

現在｜「3 つの言葉は口の形が違う」と伝えると、子どもたちがマスクの中で口を動かし形の違いを確認している。口話の体験を自分でやってもらうようにした。また、「家に帰ったら口話クイズをやってみてください」と伝えた。

●多様性の伝え方

前回｜以前より聞こえない人の多様性を伝えている。自己紹介の時「私は手話を主に使う人です。その他、いろいろな聞こえない人がいます」と伝えている。時間があればもっと伝えたいが、現在の時間ではこれが限界。

●進行について

前回｜「聞こえる人ですか、聞こえない人ですか？」と聞いていた。

現在｜「聞こえない人ですか？」と、「はい」「いいえ」で答えられる聞き方をすることで、よりスムースにした。

シーン２のバージョンアップ

●実感させる工夫１

前回｜音声信号機の音を、声で「ピヨピヨ」と伝えていた。動画や録音することも考えられるが、準備や当日のタイムロスも出そう。声まねでもどんな音かはわかるので、街中で発見する楽しみとして残す。

●実感させる工夫２

前回｜段差 2cm の問題を、視覚障害者と車いす使用者の立場から伝えた。

今後｜ 2cm の段差とはどれくらいのものなのか実感してもらうことも考えたが、ベニア板などを持ち込み実演するのは、準備としても時間的にも現実的でない。教室にある２ｃｍのもの（テーブルの厚さなど）を見てもらって実感してもらうことも考えられる。

●相手の立場を考える

前回｜段差 2cm 問題を自分の立ち場から発言。

現在｜視覚障害者から「車いすの人は段差がない方がいいんですね」、車いす使用者から「視覚障害者は段差がある方がいいんですね」と相手の立場になって言う。

●その他

・踏切の問題は大きいがここで取り入れるのは難しい。防災も、話が広がってしまい収まらない。

シーン３のバージョンアップ

前回｜登場人物情報を伝えずに考えてもらった。

現在｜最初に登場人物紹介（できるだけ当事者に話してもらう）をする。外見ではわからない人もいる。エレベーターは５人しか乗れない。「エレベーターに絶対に乗ってもらいたい人はだれ？」と聞く。次に「どちらかというと乗ってもらいたい人とその理由」を聞く。「君たちはどうすればいい？」と、子どもの役割も聞く。

シーン４のバージョンアップ

前回｜ LGBT の説明を入れていた。小学生には難しいかという意見があったが、病気で治せばいいという問題ではない。そういう感じ方をする人もいる、自然なこと。思春期になると強く感じる子もいるので、小学生の時に伝えることが大切だと思っている。

（３）新 UD 出前講座のポイント

基本の考え方

小学校４年生以上を対象にした、90 分程度のプログラム

プログラムの柱

前回ワークショップの意見から、新 UD 出前講座の柱として、以下の３つを抽出しました。

（1）尊厳
・一人一人を大切にし、やりたいことが実現できること
・障害を理由にできないと言われてしまうと、尊厳を傷つける。

（2）「社会モデル」
・やりたいことを実現するために、社会の側の環境を整えること。

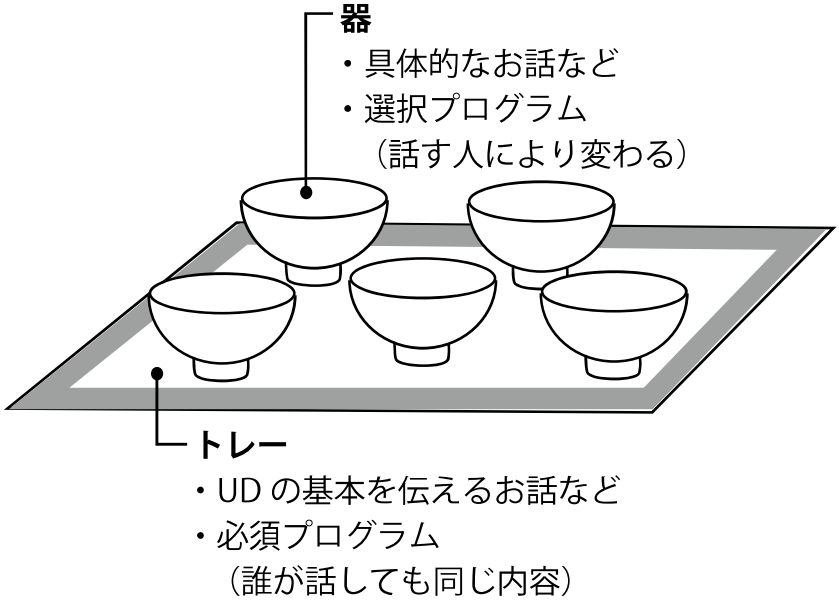
（3）登場人物の多様性
・私や他の立場の人がその場にいたらどう感じるかを考える。

アイデアを出す時の考え方

「トレー」と「その上に載せられた器」を想像してください。

（1）トレーは UD の基本を伝える内容で、必須プログラム
・誰が話しても同じ内容を伝える。

（2）器は UD の基本をわかりやすく伝える具体的なエピソードで、 選択プログラム
・話す人により内容が変わる。



（４）お話｜尊厳と社会モデルについて考えよう

川内美彦アドバイザー

以前、ある学校に講演に呼ばれた際、校長先生から言われた言葉。

「障害のある人の授業で、子どもたちに思いやる心が育まれます」。

教育者でさえ、障害のある人は思いやりの対象だと考えており、その考えを次の世代に伝えようとしている。なぜ障害があると思いやられる対象になるのだろうか。その背景には、障害のある人が弱く、社会の人々に守られなければならない人だという先入観があるのではないか。

●川内の経験　空港で

搭乗ゲートを通り、搭乗橋を渡って機内に向かう。搭乗橋は、川内にとってはまったく心配のない緩やかな下りで、そのまま下って行こうとしたら、係員に制止された。

「下りは危険なので私どもの介助で後ろ向きで」。

そこから延々と「行かせろ」「行かせない」のやりとりが始まった。車いすで生活している私が安全に行けると判断したことよりも、私のことを何も知らない係員が判断したことがなぜ優先するのだろうか。障害のある人の判断は信用できないと言われているのと同じ。

こういう時の殺し文句は「お客様の安全のため」。

では日本中のスロープはぜんぶ危険で、事故が多発しているのだろうか。スロープの基準は信用ならないのだろうか。ここで航空会社がやるべきなのは、スロープの勾配を基準内に収めることと、それでも不安だという人に介助を提供することではないのだろうか。一人で十分やれるという私の判断は、あっさり否定される。それは私の車いす使用者としての経験がぜんぶ否定されることで、私としては受け入れられない。

こういう場面は「あなたのためですよ」と親切顔をして、突然やってくる。私には「自分の行動は自分で判断している」というプライドがある。しかし相手は、そんな私のプライドなどお構いなしに、彼らの考えを押し付けてくる。

障害のある人の判断はそんなに信用できなくて、あっさり引っくり返しても構わないものなのだろうか。彼らは「安全のためです」と言うが、そんなに障害のある人は危なっかしいのだろうか。

●園路の両側に手すりのある公園

両側を手すりでガチガチに囲まれた園路。公園内を散歩はできる。手すりで囲まれているから迷子にはならない。安全。でも、自分で好きな園路を選ぶことは許されない。

この手すりは、社会が障害のある人をどう見ているかを正しく映している。社会は障害のある人を「危なっかしい」「目を離してはいけない」「次に何をするかわからない」といった目で見ているのではないか。

公園を歩くくらいは認めよう。でも問題を起こしてもらっては困る。問題が起きるくらいなら囲ってしまえ。

車いすで町を歩いても、声をかけてくる人は極めて少ない。普段は見て見ぬふりをしているが、自分に影響が及ぶことになると、とたんに「安全のため」「あなたのため」と言って過保護に扱う。その中には、自分にトラブルが及んでは困るという「保身」もあるのだろう。

この国で障害のある人として生きるということは、プライドを持つことを否定されること。こうして周りからの親切な顔をした圧力によって、障害のある人は自身の「尊厳」（= 人としての気高さ。プライド。自分を大切に思う気持ち）を傷つけられていく。そして最後には、自分に尊厳があることさえ忘れさせられる。主張せず、ニコニコして周りから言われることをただ受け入れていれば、波風は立たず、穏やかに暮らしていける。

これは社会が障害のある人にそう仕向けている、社会がそういう障害のある人を選別しているということ。そうして社会は、障害のある人に対して、主張しない、拒否しない、反論しない、弱い人だというイメージを持つ一方で、障害のある人を「心・やさしさ・思いやり」の対象として、いたわるべき人たちだと扱いたがる。

他者を思いやり、やさしく接することは人としてとても大切なこと。しかしそれは相手が障害のある人だからそうすべきなのだろうか。

校長先生の言葉。「障害のある人の授業で、子どもたちに思いやる心が育まれます」。障害のある人は教材ではない。思いやられるために生きているわけではない。障害のある人が外出すると、無関心を装いつつ、横目で監視されている息苦しさを感じ続けることになる。

●ある町でのできごと

先日、ある鉄道の終点にある小さな町を訪れた。初めての土地で、スマホのナビが示す曲がり角を曲がったら、工事中で通行止め。いかにも地元の人のアルバイトと思しき女性警備員が、もう一つ向こうの角を曲がるように教えてくれた。そちらに向かおうとすると、道案内してくれるという。

見えているから大丈夫と言っても同行してくれた。世間話をしながら角まで来て、別れてその人は帰って行った。

その人の飾り気のない態度は、私が車いす使用者であるからではなく、迷って来る人すべてにそのような応対をしているように感じさせた。

空港では私の主体性を否定してきた。

この小さな町の出来事では、私の主体性には踏み込まずに補助に徹していた。

主体はどちらにあるのか、誰が判断するのか。

この２例からは、同じような親切顔でも全く異なる側面が見えてくる。

●駅のホームにあるポスターから考察

このポスターに従って、ポスターに示されている人に譲ったとする。外見上は障害があるとは見えない人もいる。しかし、

◆内部障害のある人かもしれない

◆そのときとても体調の悪い人かもしれない

◆エスカレーターや階段に何らかのトラウマのある人かもしれない

この人たちとポスターに例示されている人たちで、どちらが優先順位が高いかは、誰にもわからない。ポスターで示されている人たちは、単に外見だけの例示に過ぎない。例示されていないけれどエレベーターを必要とする人は多い。

●ここ【しか】使えない人は誰か？

（一部の）車いす使用者の主張として、「自分たちは、ここ【しか】使えない。だから優先にして欲しい」がある。しかし、ここ【しか】使えないのは、車いす使用者【だけ】ではない。こういう主張は、外見上は障害のある人に見えないけれど、ここ【しか】使えない人を排除することになる。

外見上は何ともなさそうな人が、車いす使用者を優先せずにエレベーターに乗り込んだ時に、その人を非難するのは誤りだ。周りからは分からない事情を抱えているかもしれない。その人がどれだけエレベーターを必要としているかは、周りからはわからない。

外見からは分からないがエレベーターを必要としている人と、ここ【しか】使えないと言っている車いす使用者。どちらに優先順位があると決められるのだろうか。

ポスターに例示されているかどうかではなく、周りの人にわかるかどうかではなく、自分はどうするかを考えて行動したい。

このポスターでは、例示されている人たちのために「あなたの利便性を譲ってやってくれ」と言っている。その行動を「やさしい心づかい」として、譲る理由を説明している。

譲る人には「あの人のために」という思いが強調され、譲られる人は、周りの善意に支えられて行動「させていただいている」という思いを抱く。

ここで上下関係が生まれる。上下関係を生まないためには、「あの人のために」や「させていただいている」という思いが生まれないようにする必要がある。

日本人は利他的な行動をとることができるといい、特にコロナ禍ではそれは美徳として語られることが多い。しかしここでは利他的を強調することで上下関係を生み出している。上下関係を生み出さずに譲る、譲られるの関係を考えたい。

このポスターは、困っている人のためにという「他者のための行動」を求めている。このポスターがそう言っているから譲る、ということであるならば、このようなポスターが貼ってないところでは譲らなくてもいいということだろうか。ポスターがあるから行動する／ポスターがないから行動しない、としたら、それはポスターのための行動で、本人の主体的な判断はどこにあるのだろうか。

ポスターの有無ではなく、自分はこう行動するという価値基準を持ち、それに従って行動するという「自分のための行動」であるべきではないか。

「ポスターが言っているから」ではなく、「ひとのために」でもなく、「自分はこう考えるから」という、自分自身の行動規範を持ち、それに従って行動する人が増えることを望む。

各自が自身の行動規範に従って行動できるようになれば、こんなポスターはいらなくなる。逆に言えば、このポスターは、日本人にはまだ主体的に行動できる人が少ないことを表している。

欧米に行けば、このようなポスターがほとんどないことに気づく。そのくせ、普段はべたべたしないのに、いざというときにはさっと手が出てくるという。そこが欧米と日本の根本的な違いなのかもしれない。

（５）前回のまとめ｜新 UD 出前講座へ反映させたい意見（○付数字はグループ番号）

テーマ

●尊厳も含めた UD の説明

・尊厳の話をもっとわかりやすく伝えたい。②

→「尊厳」という言葉を使う必要はないが、「尊厳」は大人でもわかりにくい概念。（全体）

→「手伝えばいい」ではなく、「自分でできる」「自分でやりたい」プライドがある。手伝いは一見よさそうだが、当事者としてはいい気持ちはしないこともある。（全体）

●社会モデルをわかりやすく

・この出前講座の目的は「人の状態によってできることできないことがあるが、社会的に環境が整えば解決・行動できる」＝まさに社会モデルを理解してもらうこと。（全体）

・医学モデルと社会モデルをわかりやすく。⑥

●登場人物の幅を広げる

・障害者以外の広がりが欲しい。「自分は関係ない」と思わない導入。②

・病気になった時を想像してもらう（足を骨折して松葉杖、目に眼帯など）。⑥

・ＵＤの幅を考え直す（高齢、精神疾患、LGBT、知的、障害者以外など）。①

→「みんなもできなくなることがあるから、こういう環境が必要」という説得は、個人的には障害を持つことを「そうなったら大変」とネガティブに伝える気がする。（全体）

→「あなたたちにも便利」という言い方で、障害に特化しないことが大切。（全体）

・社会的な弱者の幅を広げることは必要だが、現在の枠組みでは時間が足りない。①

・出前講座では肢体不自由者などの話が多かった。高齢者、LGBT はあったが、精神障害や知的障害の話はあまりなかったが、小学４年生にはちょっと幅が広すぎるか。⑤

・出前講座では孫に話しかけるようにすることで、緊張もほぐれるし距離も縮まる。⑤

・子どもたちも生活状況が異なり、友だち間でも壁があるかもしれない。相互理解の思考を身に付けることが、我が事として UD を考えることにつながる。①

プログラムの工夫

●参加・体験型、自分で考えるのが良い

・参加体験型がこの出前講座の良いところ。自分の頭で考える時間があるのが良い。①

・できる方法を自分で探す、全てにおいてイメージすることの大切さを実感。④

・もっとお互いに触れあう機会（対話、声かけなど）があり、知識だけではなく行動につながると良い。→今はコロナ禍なのでやむを得ないことは理解できる。①

・「モノの UD」の他に「思考の UD」があるのでは。思考の UD（頭の中を UD 対応の思考回路にする）のきっかけとして、障害者との触れ合いが大切（コロナ禍で難しいが）。⑤

● ICT 等の活用

・子どもの方が ICT のスキルがあるので、動画などで見せることも考えられる。②

・今の子ども達の感性に合っているのだろうか？ICT 等の技術もアップデートされ普及している。子ども達の感想を聞いてみたい。④

・現在小学校では全児童にパソコンが支給、ICT 活用が進み、オンラインでチャットやグループディスカッション、クラスごとの発表も共有している。コロナ禍でできなかったことや課題を解決する契機になりそう。④

・動画など IT を活用してバージョンアップにつなげることができれば良い。⑤

●直接本人の話をきけることが良い

・リアルな不便さなどの話を本人から直接聞ける（なかなか普段は聞けない）。①

・障害当事者が困っていることを、出前講座でもっと伝えられると良い。④

・ICT が発達してきたからこそ、生の人と出会う出前講座が重要でもある。②

・オンラインの活用もあるが、この出前講座は子ども達に体感してもらうのが良いので、今の対面型をベースに進めた方が良い。④

●ペースや集中を配慮

・４年生にはペースが早い、十分理解できているのかなと感じた。集中も考えて休憩を入れる、２回に分けるなどした方が良いのでは。④

・動きがあって飽きさせなくて Good。子ども達が動く場面がもう少し増やせたら良い。④

出前講座から発展した取り組みアイデア

●出前講座前後の授業展開

・教員用動画を作成し、先生が子どもに授業で教えられるようにしてはどうか。②⑥
→一方、直接当事者と会うことがとても重要だというような意見もあった。⑥
・出前授業で「今日学んだことを家で話してください」と声かけすることで、一回自分の中で消化できる。家で話した結果を再度戻してもらえると、4 年生らしい「社会貢献」につながるかもしれない。①
・出前授業後、児童が我が事、自分の周辺で気づいていく、その点を掘り下げる出前講座にできると良い。見学だけでなく行動に移す勇気を出すことが大切だ。④
・校外学習の一環として、例えば交差点（安全を考慮して）に行き、意見を出し合うようなことができると良い。授業 1 回だけで終わらせない方が良い。④
・学校で出前講座を行う時は事前に学校の周りを調べたりするか？⑤
→学校周りの点字ブロックやエスコートゾーンについて調べることがある。（全体）
・出前講座後の宿題に、障害者だけではなく外国人や生活に不自由な人への声かけを子ども達にしてもらう案が出たが、安全面などから難しいとの意見もあった。⑤
・授業の活用について学校と話せると良い。出前授業のシリーズ化や、2 回目 3 回目の（別の）授業にもつながる。①
・学校と連携できないか。例えば UD コンテストをやり感想や体験談を聞く。また他学校ではこんな意見が出たということを伝える。⑥
・出前授業の前後の全体学習を知りたい。学校がタイトなカリキュラムの中でやっていることは理解している。⑥

●親子でみてもらいたい

・動画配信できないか。工夫により相互のやりとり（質問など）もできるのでは。①
・親と一緒に授業をできると良い。①
→公開授業でやったこともある。（全体）

●小学校以外での展開

・他でもつかえそうなプログラムである。小学校のみでやるのはもったいない。①
・小学校だけでなく中高等年代により気づきをどう展開していくのか考えられると良い。④
・高校生も視野に入れて授業を考えられると良い。学年別や初級、中級、上級などバリエーションも作れると良い。④

●事例紹介｜練馬区の取組み

・学校にヒアリングに行き何をやりたいのかを詰めて、その後プログラムを提案。その間、障害のある区民の方と授業内容について企画会議をやった。（全体）
・先生から「子どもたちに、疑問を持たせて終わりにさせて全て教えないでください」と言われた。そこでとにかく「障害者と子供たちを触れ合わせよう」とした。いろんな障害者とわいわい授業をして、いろんな人がいたねお互いに困ったことがあったら助け合おう、それが共生社会や UD 社会だよねという、江東区に比べればかなり簡単な授業。（全体）
・デモンストレーションをやる場合は、子どもたちと障害のある方が触れ合いながら行えるといい。例えば子どもたちが視覚障害者を学校案内する、一生懸命考えて連れ回すみたいな無茶ぶりだが、ストーリーがない授業に良い反響があったと思う。（全体）
・授業後の発表会に参加したり、アンケートでプログラムや授業後の児童の変化を聞いたりした。一年間で 4 校実施が限界だった。（全体）

（6）グループワーク｜新 UD 出前講座のアイデア出し

５つのグループに分かれて話し合った内容の一部を掲載します。

1 グループ

●主体性について

・主体性（その人がやりたいこと）を「自分で」判断すること。どうしたいかは、相手に聞く。

・小学生に「席をどうぞ」と言われた時、「ありがとう」といって応じることも自分で決める。

●工事現場で

・「いいです」「大丈夫です」と言っているのに、だまって後ろからついてくる。

→見えない人にはわからない。（寸劇案採用）

・どうせ見えないからわからないと思われているのでは。尊厳を傷つけられたように感じる。

●まちの中で

・「（見えない人が来たから）そこ立ってちゃダメ、よけてあげて」などと大人が子どもに言っているのはイヤな感じ。子どもが自分を見て「あの人目が変だ」ということはイヤではない。親が「なんでそんなこというの」と叱っている方がイヤな感じ。そういう時は「よく気がついたね。目が不自由なんだよ」と教えてあげられる。

・見えない知り合いに会ったときについスルーしてしまったことがあるが、それを後から聞いたら嫌な感じがするか。

→　お互いさまじゃないので、ちょっと嫌かも。

●電車のシートで

・車いすで電車に乗っていたら、席を譲られたことがある。

・中学生の頃に学校の先生に「そんなに難しいなら席に座らなければ良い」といわれ、それを守って 30 代くらいまで席に座らなかった。

・席を譲ることは勇気がいる。→　なぜ？

→　同情とセットのように感じるから？

→　どうして良いかわからない。

→　相手に聞くことが必要ではないか。

・この WS で「障害者理解」ではなく「UD 理解」が必要ではないかと感じた。

・断られたことが恥ずかしいのではなく、知らないことが恥ずかしい。

・席を譲ろうとした中学生に、隣のお母さんらしき人が「いいかっこするんじゃないよ」といって止めた。（寸劇案採用）

・大学生らしき三人が、席を譲る人を決めるためにジャンケンをし負けた人が譲った。席をゆずることは貧乏くじをひいたこと？　とその決め方に疑問を持った。（寸劇案採用）

●交差点で

・信号機の青から赤に変わる時間が早すぎる（杖を使っていて速く歩けない）ので、警察に言ったら「GDP が下がる」と言われた。

・シルバーカートを押している高齢者に、そこに座らせてもらったことがある。

・救急車が通る時に見えないのでどうしたら良いかわからず、交差点の真ん中で立ち止まった時、「ゆっくりどうぞ」「赤ですけど大丈夫」などと声（スピーカー）で知らせてくれた。

2 グループ

●お店のつくり

・2 階のレストランに行くため電話をしたら「エレベーターがあるので大丈夫」と言われたが、エレベーター前に 2 段あり入れなかった。

→　バリアフリー化対応の判断が、お店側と利用者で異なる / 情報提供の正しさ

・イスが固定されていて、車いすがテーブルに入ることができなかった。

・畳しかないお店で車いすのタイヤを丁寧にふいていれてくれたことがあった。

・酸素ボンベ使用でも畳は困った。特に掘りごたつはどこに酸素ボンベを置いて良いのか困る。

・車いす使用者：バイキングコーナーは苦手。店員に取ってきてもらう。

→　自分で選ぶのがバイキングの楽しみなのに、店員さんに運んでもらうのはつまらなさそう。
・車いす使用者：知らない町だと、入れる確率が高いファミリー・レストラン等に行く。
・公衆便所は利用者が限られているものがある。

●食事の内容

・アレルギー、塩分制限、何の肉を使っているのか分からない。

●暗黙のルール

・「女性は料理を取ることが当たり前」の雰囲気。
・宴会時:レモンをかける際は、周囲の人に聞く。
・宴会時：焼き鳥に七味をかける時は気を使う。
→　好みの味付けは人により違う。事前に聞く。
・「取りあえずビール」だと、ビールやアルコールが苦手な人は困る。
→　最近は「ビールじゃない人？」と聞いて、最初にビール以外を飲みたい人の希望を聞く。少数派を優先して聞く。逆だと言いにくい？

●周囲の目・理解

・「只今混雑していて、相席でお願いできますか？」と言われて諦めるしかなかった。
→　障害者の中には食べ方が他の人と違い、相席だとゆっくり食べられない人もいる。
・マスクをできない人がいる。
→　知的障害などマスクをする理由が分からない人がいるが、理解されない。

3 グループ

●困った・良かった聴覚障害者の体験

・話は口形でだいたいわかるが、現在はマスクをしているので、口形に変わるものが必要。
・身ぶりで「書いてください」と示して、相手に書いてもらうこともある。
→　良かれとたくさん書かれるとわかりにくい。
→　筆談ではポイントを絞って書いて欲しい。
・レジ袋の件は大変。言われてもわからず「ああ袋か、いりません」とやりとりすることがある。
・モスバーガーで店員さんが写真入りメニューで指さししてくれて、スムースだった。

●コンビニの体験

・コンビニのレジが機械化され対応にとまどっていると、店員に「なんだよ」的な態度をされた。使い方がわからないことが、店員はわからない。
・機械化で生まれた時間をコミュニケーションに使わない。コンビニの接遇が良くなることは、お客さんにとってもお店にとっても良いこと。災害拠点にもなるしトイレも使える。
・レジでは、お金以外の「お箸」「温める」もある。
・レジの背面にあるタバコは、番号を伝えてとってもらう。聴覚障害の方でたばこの番号を伝えたつもりが、肉まんが出てきたことがあった。
・コーヒー１つとっても、「レギュラー、キリマンジャロ」「カフェラテ」×「サイズの S と L」×「アイスとホット」と複雑。
・店員さんに外国の人が増えた。
・コンビニにこんな工夫があったらいいな
→　指さしコミュニケーション支援ボード。
→　大きい文字、写真を見て選べる。

4 グループ

●優先席の「枠（対象）」とは

・空いている席がなくて、具合が悪いときにやむを得ず優先席に座ったら、混んできて視線が冷たかった。高齢者が目の前に立ったので、実際以上に具合が悪い演技をしてしまった。
・妊娠初期のつわりのひどいときに、つらくてマタニティマークをつけていても、おなかが大きくないので、理解されないことが多かった。
・女性が優先席に座り、マタニティマークを見えるようにバッグの位置を変えた。

・お年寄りは、譲って良いのか迷う。
・弱視なので、明らかに困っている人はわかるが、何かしてあげたくても、できないのが残念。
・常に優先席は一杯で、通常座席と同じように見える。元気に見える人が座ると、混んだ時に居心地が悪くなる。視線が気になる。
・スマホ使用者（ペースメーカーに影響）は気になる。
・視覚障害者が迷っていたら、優先席に案内されていた。何だが違う気がした。高齢者や障害者が最初から優先席に座るとは限らない。
・外国の人に席をゆずられた。弱視となぜわかったのかと思って理由を聞いたところ、「インドでは女性には席をゆずる」と言われ新鮮だったが、場合によってはそうした扱いをインドの女性は不満に思っているかも知れない。

●優先席の役割

・優先席でなくても席が必要な人がいれば、ゆずった方が良い。困っている人がいたら助ける。
・ブラジル人から「なぜ日本には優先席があるのか？」と問われたことがある。
→　優先席は、困っている人に席をゆずることをみんなに伝え意識づけるためにあるのでは。
→　自分で考えるより、誰かにルールを示してもらったほうがやりやすい。
→　日本人は自分から声かけにくいから。
→　子どもには最初に「困っている人がいたら席はゆずる」前提を伝えたうえで、どうして優先席が必要なのかを考えてもらうのはどうか。
→　「優先席が空いているので」と、一般の席に困っている人がいても席をゆずらなくなってしまうような意識が生まれていないか？

→　車両全部を優先席にしたら（横浜市営地下鉄等）、みんなゆずらなくなってしまったと聞く。

●コミュニケーション

・声のかけ方に気をつけなければ、相手に不快感を与えるのかも知れない。
・ゆずるかどうかが面倒で最初から立っている。ある意味コミュニケーション拒否。

5 グループ

●サイン板に関して、自分が感じていること（特徴・性格を踏まえて）

・せっかちな性格で、そもそもサイン板をみない。
・文字を見るのが億劫。→　イラスト、絵、ピクトグラムなどがあるとよい（視覚化・シンプル化）。
・地図が読めない。スマホであっても地図を読むのは苦手。
・声がけできない性格。

●小学生に UD 出前講座をする際にどのような形式・方法がよいか（例、寸劇など）

・ゲーム形式だと子どもも楽しみながら学べるのではないか。
・ゲーム形式だと競争心も刺激し、子どもの興味を引くのではないか。
・ゲーム感が強過ぎると「楽しかった」だけで終わってしまうので考えてもらう時間があるとよい。
→ ゲーム形式とワークショップ形式の両方を含む形式がよいのではないか。